フィールドで考える

# アボリジニ研究事始め

小山修三（こやましゅうぞう）
民博 名誉教授

## 夢のフィールドへ

みんぱくができたころ、館員は海外調査に出ようという雰囲気が強かった。「世界の民族を知ろう！」を看板に掲げてできた博物館だったし、七〇年万博が象徴するように日本経済がのぼり坂だったことも幸いした。

ところが、世界的には民族学は転換期、そう簡単に現地のムラに入れてもらえない時代にさしかかっていた。その理由は「調査モンがやって来てばちばち写真を撮り、あれこれ聞きまわって論文を書き、職をえたらあとは知らん顔、迷惑ばかりで何の見返りもない」という声が高まっていたからである。

野性に生き、狩猟採集生活を送るアボリジニ社会は人類学者にとって夢のフィールドのひとつだった。一九世紀以来、世界の学者がこの大陸に詰めかけ、数多くの記録が蓄積されている。考古学者だったわたしも、そこに行けば「縄文人に会える」と考えていた。思えば呑気なものだった。

伝統的デザインを取り入れたバティック。市場に通用する作品として高く評価された

## アボリジニ社会とキリスト教会

オーストラリア大陸がイギリスの植民地にされてから、先住のアボリジニ社会は大きな打撃を受け、絶滅寸前まで追い詰められた。それを救ったのは、キリスト教会の人びとだった。独善的で押し付けがましいという批判はあるものの、暴力にはしりがちな開拓者に比べ、人道主義的で実務をこなせる教会員を送ってその役割を果たしたことは確かである。遠隔地で厳しい環境下の中央砂漠や北海岸のアーネムランドなど旧保護区が活動の中心だった。ところが、一九六七年の国民投票によって、「アボリジニは国民である」と認められ、政府は七〇年代に入ると福祉やインフラ整備などこの社会が自立するために多額の資金を投入しはじめる。

その結果、急激な貨幣経済への移行がおこり、社会組織や経済観の異なる人びとの苦闘がはじまる。政府は、自立を助ける実務者として、主として白人のアドバイザーたちを投入するが、そのときモデルとしたのはキリスト教会の活動だった。

しかし、農漁業などの産業にたいする成果はほとんど上がらなかった。唯一の希望は美術工芸部門だった。芸術作品とおみやげ品の製作、特に手軽につくれる小さな彫刻や編み物などは現金収入源となって日常生活に役立ったからである。各地に工房がつくられ、市場に通用する作品を開発し商品化する、それがアート・アドバイザーとよばれる人たちの腕にかかっていた。

## 白人アドバイザーの存在

それまで空白に近かった日本のアボリジニ研究を立ち上げるためには、資料を集めることと調査地を確保することが必要だった。幸いそれが成功したのは、まずみんぱくの展示資料の購入があったからである。オーストラリア国立大のピーターソン教授に「君たちの調査は、美術・工芸品を購入するから許可がおりた。現地の人に好かれることはもちろんだが、白人アドバイザーの信頼をえることがもっと大切だよ」と言われたことを憶い出す。

この文を書いたのは、わたしたちが大変お世話になったW・ヒリヤードさんの訃報を聞いたからである。享年九二歳。長老派教会がつくった中央砂漠のアーナベラ・セツルメントで一九五四年から八二年まで献身的に働き、アート・アドバイザーとして「ろうけつ染め」を導入して注目された。彼女には、一九八三年にはアボリジニ女性たちとともに来日して展覧会を開いてもらい、一九九二年の特別展にも来ていただいた。おかげで、みんぱくのアーナベラ・コレクションは充実したが、それにもまして、彼女の経験に基づくアドバイスにより現地の人びとと楽しくつきあいながら調査ができた。

こうして、世話になった人たちがつぎつぎとなくなっていくことに、三〇年という歳月の重さを感じる。今も若い研究者はフィールドをめざして、さまざまな苦労をしているのだろう。成功のカギとなるのはやはり人間関係であり、真心の問題だとおもう。

アーナベラ・セツルメント（砂漠のオアシス）

来日した女性アーチスト、ユパティさん。
砂漠地方では技術指導者としても活躍した（1983年）

ヒリヤードさんと（1986年）。わたしたちの調査のよき相談役だった